

## 愚禿の信境

序

歎異抄第二章

道を求めて

往生極樂の意義

無我の仰信

地獄一定の上に

絶対他力教の本質

聖人の悲涙

序

私は幾度もくく歎異抄について語りました。特に第二章は最も感銘深く私の魂をつちかってくれました。宗教に足を入れたものが、否、人間がより深き真実を求めて生きるならば、ついにはこの第二章の、無我の大信、大行の天地にまで到達するでありましょう。そこにはただ、人間の偽らざる相と、何ものにもおわれざる純粹なる如来の本願とが光っております。聞くべきことを聞きつくし、知るべきことを知りつくし、こわすべきものをこわしつくして、ただ最後の一つが素顔を見せております。

人間の最も強い生き方と、一番謙虚な合掌と、偽りなき生命の躍動と、自由無碍なる道とが、大胆にも告白されたのがこの章であります。

一字一句、金玉の文字であります。もしこれをかみしめて、我がものにする事が出来た時、誰でも絶対他力教の本質にふれ、揚棄されたる純一の宗教価値を体認することが出来ましょう。

光明団叢書の第二集には特にこの章を述べさせて頂きます。これは昭和三年一月号から五月号まで光明に載せましたものを更に全体にわたって書きかえておさめしました。ただひたすらに信の燈炬を求め人、長く歩み疲れて、学問でもなく、倫理でもなく、一すじに救いのほしい方にとって、御参考になれば幸であります。

昭和七年盛夏

住岡 狂風識